

2021年3月



発行所 仙台・羅須地人協会

- 〒980-0811 仙台市青葉区一番町 2-5-12  
一番町中央ビル 8 階 「シニアネット仙台」内
- HP <http://rasuchijin.jp/>
- Tel 022-266-5650 FAX 022-266-5662
- Mail [rasuchijin-office@rasuchijin.jp](mailto:rasuchijin-office@rasuchijin.jp)



当協会は、事務所を、諸事情により 2018 年 10 月に上記に移転いたしました。

本協会の会報「センドードっうしん」第3号をお届けいたします。「3.11」として刻み込まれてきた「東日本大震災」からちょうど10年。物理的な時間の流れが、震災復興・再創生にとって実質的な意味をもつわけではありませんが、「10年」を迎えるにあたっての「感懐」「随感」を本協会の会員から寄稿いただきました。いただいた原稿はそのまま掲載しました（掲載順は紙面構成の都合によります）。本協会会員が、感性豊かで多様であることがお分かりになるものと思います。

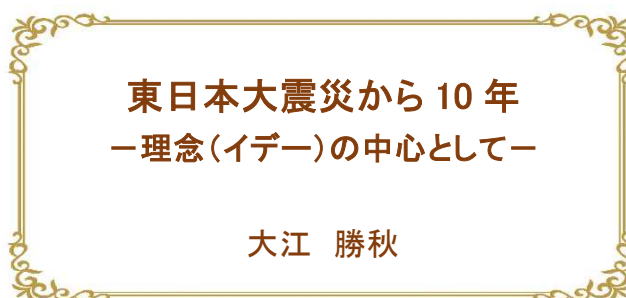


東日本大震災については、人の心を複雑に苛み続けるものが大きく、余り書きたくない。しかし、書いておいたほうがいいこと、書かざるを得ないことも無いわけではない。

端的に言って、個人的には震災の被害は皆無、ゼロに等しい。その前の宮城県沖地震は、東北大学で研究室は滅茶苦茶、教養部長で夜も寝られない苦労が続いた。そんな体験があったから

だろうが、「また来たか」と思いながら、事務所の戸棚を抑えた程度、老人ホームの我が家は、免震構造で茶碗一つも割れていない。エレベーターは止まったが、わが部屋は地上階で被害なし。作並の「賢治とモリスの館」、河岸段丘の広瀬川の源流で停電も無かったようだ。

当初、別荘なら松島や矢元など海岸沿いが良い、という意見が多かった。それを退け作並にしたのは、太平洋ベルトの環太平洋の延長、とくに「原発銀座」の福島第一の延長上は嫌だった。親友2人も原爆で失った「反原発イデオロギー」だった。今になれば正解で、作並の「館」は健在である。



仙台在住の作家、佐伯一麦氏が「こんな大災害を作品化するには10年はかかる。」と述べていたが、この間もその壮絶な体験は語り継がれて来ました。震災の翌年2012年2月18日、私が属しているNPOシニアネット仙台の「賢治教室」（代表 大内秀明）が仙台文学館で、『宮

沢賢治からのメッセージ』と題してイベントを開催。花巻市のイーハトーブセンターの後押しがあって盛況でした。そこで大内先生は賢治精神から学ぶ「新しい文明」のあり方を希求したのでした。そして、2013年3月に、復興共同センター内（上杉通・北辰ビル）に事務所を構え、“仙台・羅須地人協会”は出帆しました。この年2013年10月14日、「仙台・羅須地人協会設立記念会」と銘打って半田正樹先生の司会で行われ、200名近い参加者で会場は賑わいました。外は玲瓏な秋空で、受付係をしていた私は、「理念（イデー）の中心」はここからと確信しました。

翌年2014年から半田、田中両先生の許で、フリースクールが開校されて、今日まで6年間継続中です。このゼミナールには、マルクス、W・モリス、ルソー始め多彩な先人が取り上げられました。

この地道な活動を、河北新報・共同通信などのメディアが紹介し、世上に拡がったのを覚えています。

それに加えて、当協会では年一度、イベントを開催し、色んなテーマを世に発信しています。

（現在、コロナ禍で休止中）

その中で、特に印象に残っているのは2017年、名取市文化会館で行われた『賢治・秀松農民芸術祭』。当日の1月21日は大雪の予報が外れ、320名をこえる入場者が詰めかけました。事前に河北新報やFMなとりに取り上げられたことや、名取市市長始め行政、郷土史家の地元住民、農業高校の生徒さんらが我々を支えて参加し、まさにチーム一丸でした。

そして、震災後6年経って、名取市（特に關上地区）は復興半ばで混乱している最中でした。地元、初代名取市長の高橋秀松が、宮沢賢治と

無二の親友であったことを来場者が知って、誇りと励みになりました。宮農高和太鼓部の「復興太鼓」の演奏も花を添えました。

招待席には、先立たれた大内芳子さんが、ご主人の大内先生の勇姿を、目を細めて聴き入っていたのが思い出されます。

この準備に仲間と数ヶ月奔走した私の心中に自ずと拙い句が生まれました。

「耀（かがよ）フ午後 春光一闪 寒風ヲ斬ル。」

私の震災10年は羅須10年とパラレルに重なり、失われた言葉は回復されつつあります。

## 東日本大震災に寄せて

河合 秀次

あれからもう10年、何とはやい事か！

あの悪夢の様な3/11、私は北アフリカ/Algeriaで勤務中だった。パソコンのYahooニュースで日本の大地震を知り、大急ぎで自宅に電話したが案の定なかなか繋がらず、半日後にやっと家族の声を聴く事が出来た。

「自宅内には宿泊出来ず、庭の駐車場での車中泊だった。」との由。それでもまだマシな方で、場所によっては壊滅状態、仮設住宅に寝泊まりした方々も多数おられた。幸い長女の会社の計らい（ご親切）でホテル等へも宿泊出来て、かなり恵まれた方だった、と聞いている。

ご夫婦で罹災し、或いはご家族で手を繋いだまま、波にのまれて遂に手を放し、そのまま別々になられた方々の事を思う時、胸が痛むどころか張り裂ける思いだ。10年を経ても、なかなか心の傷は癒えないのは私だけではあるまい。で

も風化させてはならぬ。

これからは、より精度の高いハザードマップや震災予知、仮設住宅手配、食料準備、心のアフターケア等々、行政にもお願いしたい事は沢山ある。ボランティアや自衛隊の皆さんが仮設の風呂を設営し、利用した被災者の皆さんのサッパリとした顔がテレビ画面に映ると、自身も何故かホッとしたのをつい昨日の事のように覚えている。地震は天災だが、後続の対応は人災（的要素）もあり得る。

昨今、若い世代の罹災者の方々が震災の悲惨さを風化させぬ様、積極的に随所で語り部をなさっている様子でメディアに報道され、頼もしくかつ心強い限りである。

現在猛威を振るっているコロナ禍もそうだが、災害対策には与党も野党もナシ、というのが僕の年来の自論（持論）である。政争の具にだけはして欲しくないもの。

因みに、私自身は年に7回、テレビや新聞に向かって黙祷を捧げる日がある。1/16（アルジェリア／イナメナス・テロ事件／私は当日同国の別 Project 従事中）、1/17（阪神淡路大震災）、3/11（東日本大震災）、8/6、8/9、8/15の戦争関連、9/11（ニューヨーク／同時多発テロ）の7回だ。1分間返はせずとも、20～30秒はテレビ画面に向かって黙祷しご冥福を祈り、自身の心に刻み直している。

被災者の皆さん全員が1日も早く新たな人生を歩み出して前進なさる事を祈念して本稿を閉じたい。

パプアニューギニアの日本人キャンプ自室にて。

## 率先避難伝承碑を

今野 禎市郎

「大切な書類、落しちゃダメよ」連れに言われて足もとを見ると書き終えたばかりの罹災証明と被災建造物撤去申請の書類が散らばっていた。震災から一カ月後の石巻市役所は混雑していたが、窓口前列をなすまでではなかった。職員多くは全国の県や市町村が急遽派遣した人なのに手際よく応対してくれた。育った家が市内に残っていて震災で全壊したと告げると、では申請書類に被災家屋の所在地などを書いてくださいと言われた。その書類をうっかり落としたのだ。市役所に来る途中に目にした、街並みの変わり様に啞然とし、呆然状態だったのだろう。

家は旧北上川の河岸棧橋兼幹線道路に面していた。つまり目の前が川である。この兼用道路が津波で完全に壊れて通行止め。裏からの路地は入り口に漁船が瓶のコルク栓のように挟まっていてどうにもならない。横から覗いてもがれきで見えない。

そんなわけで河口に向かうと異界のような風景が広がっていた。南浜町である。焼け焦げた車が数え切れないほど台数積み上がっていた。元門脇小学校が黒く焦げて残っていたが、ほとんどの人工物は壊れ燃え、流された。400人を超える人々が犠牲になった。その中、門脇小学校の校長が率先して学童224人を避難させた。顛末を知った時、さながら「稲むらの火」だと思った。「日和山に上がれ、早く登れ」と女性校

長がメガホンで学童を鼓舞して自ら先頭に立って裏山に登った。子や孫を心配して学校に駆け付けた人たちが続き、さらに多くの人その後を追った。NHK スペシャル震災 10 年「津波避難 生死を分けたもの」によると、その数 300 人以上と報じている。ラフカディオ・ハーン、日本名小泉八雲は明治三陸大津波の取材や和歌山の広村の堤防にインスピレーションを得て「A Living God」を書いた。これをもとに教員の中井常蔵が小学教科書用に「稲むらの火」に書き直した。高台の自宅から津波が襲来するのを見た庄屋が早く下の村民に知らせようと刈り取ったばかりの稲束すべてに火をつけたというのがあらすじである。海岸に私財をなげうって防潮堤を造った偉大な先駆者をリスペクトする作品といわれている。

八雲の「A Living God」は世界中で読まれた。ツナミが世界の共通語になったのはこの本の力が大きい。先ごろニュージーランド沖で M8 の地震が起きた時、現地のアナウンサーがツナミを連発していた。

旧門脇小学校の「率先避難」は記憶すべき重要な震災遺産である。世界中に広がればいいと思う。地元で伝承碑が立てられないかと思っている。候補地は門脇小学校跡や、間もなく完成する震災祈念公園などいろいろあるが、多くの人が助かった日和山を希望する。宮沢賢治の詩碑の付近がいい。「われらひとしく丘に立ち」の詩碑のことを前に書いた。拙文が仙台・羅須地人協会のホームページの「田園から～オピニオン」に入っている。



## 東日本大震災の 体験から思うこと

岩谷 芳江

東日本大震災から 10 年が経ちます。今まで体験したことのない巨大地震は大津波と東京電力福島第一原発の爆発火災事故とが重なり、想像を絶する惨事となりました。

宮城、岩手、福島の沿岸部では津波による死者、行方不明者が 1 万 8,000 人、関連死 3,700 人、そして未だに家族を探し続ける姿が報じられる度にその無念さ、喪失感は何ばかりであったことかを思い胸が痛みます。自然災害ゆえ、それでも海を恨まないと言った中学生の言葉が印象的でした。

それに対し、東京電力福島第一原発の事故は明らかに人災であり、放射能による影響は広範囲に及び遠くは静岡の茶畑をも汚染し、当初は福島県民の 16 万人が避難を余儀なくされました。家族、仲間、地域をばらばらにされ、今も故郷に立ち入ることさえできない人々もいます。人間の力、技術力では制御不可能な原発施設を設計不備のまま安全神話の下で放置してきた罪は許し難いものです。この原発事故の教訓から当然のことながら全国の原発は稼働させることではないものと思っていたところ、あろうことが各地で次々 9 基が再稼働しています。巨大地震も津波もいつ何処で起きるか分からない以上、政府は原発に代わる再生可能エネルギーへの歩みを急ぐ方向で、計画を具体的に示すべきかと思えます。

岩手の三陸沿岸では昔から「津波てんでんこ」

という伝えがあり、地震の際には同時に津波を想定し津波が来る前に、誰もが（幼い子であっても）自力で高台に声を掛け合って逃げることを教えられてきました。今回も釜石の小中学生3,000人全員が無事だったとのこと。「津波てんでんこ」は、日本はもとより世界中に伝承されるべき防災意識です。また、住宅を高台に移転し職住分離が一層進むことを願っています。

仙台市では昔、津波がこの場所まで来たことを伝えるものとして、蛸薬師神社(太白区長町)や浪分神社(若林区)があります。全国にも同様の神社や石碑、木碑で伝承してきたものが数多く残されていると聞きます。今回も亡くなった方々への思いを皆で共有しながら新たな津波の教訓を刻む活動が方々で行われており、伝承の歴史を学校や地域の中で学び合うことの大切さも再確認いたしました。

「3.11」の震災後、私たちは大自然の大きな力の働きの下、この地球上の地に住まわせて頂く身であることを、つくづく感じる次第です。この共有地の土、水、空気は大自然からの恵みであり、その営みに沿った暮らし方を皆で共有し合えるようお願いながら、これからも活動を進めて参ります。

## 東日本大震災

加藤 純子

10年前の3月11日は職場にいました。長い揺れが続き停電しましたが、免震構造の優れたビルなのか、物が落ちたり壊れたりはしなかつ

たと思います。

交通は全てストップ。雪の降るなか徒歩40分くらいで私は帰宅できましたが、帰れずに職場にとどまったり、5時間歩いて帰宅した同僚もいました。JRがしばらく動かなかったため、翌週からの仕事も朝5時発のバス利用の同僚もいました。

停電し携帯の充電が切れたため、中三の次女が学校で作った手回しラジオが唯一の情報源でした。大きな津波が来て沿岸部は大変なことになっていることは伝わってきました。気仙沼にいる親戚の安否が気でしたが、判ったのは停電が解消した4~5日後くらいでした。親戚は何とか避難し大丈夫でしたが、明治三陸地震で被害がなかった高台に避難した近所の方々が津波にのまれてしまったそうです。私も私の子供たちも毎年夏休みになると海水浴に行っていた風景が全く変わってしまいました。伯母は「津波のあと泥をかき出すのが大変だなあ」と思いながら、割烹着と長靴でたまたま遊びに来ていた友人の車で逃げたのですが、残ったのは家の土台だけでした。内陸部でも家が全壊し仮設に入った人もいますが、津波被害のあった所はより深刻です。

10年たった今も35,000以上が避難を続けている福島。いまだに自分の家に入ることも制限される場所があり、廃炉や汚染水の問題も未解決。いつになったら解決するのかわからない問題が山積み。安全でも低コストでもないことがわかった原発をどうしたらよいか？

昨年9月に刊行された『人新世の「資本論」』の第5章で、協業・他者との交流を促進する「開放的技術」と一般人から隔離された「閉鎖的技術」があり、この区別が必要だ。原子力発電は閉鎖的技術の代表格であるが、グローバルな危

機に閉鎖的技術は不適切と論じています（アンドレ・ゴルトツの技術論）。なるほどそうですね。すでにある「不適切」な原発をどうするか？という問題は残りますが…。

仙台・羅須地人協会の設立趣旨は「震災後の生き方を透視すること」とのことですが、私は資本論（とてもひとりでは読み通せない内容）を大内先生が講師で読書会があると新聞に載っていて入学しました。講義の内容が難しくて理解できないこともあります。学ぶことがたくさんあります。ありがとうございます。今後ともよろしく願いいたします。



## 災害と共生する

内田 龍男

以前住んでいた静岡県下田市は、伊豆半島の先端に位置し、東京都心から 200 キロほどしか離れていないにもかかわらず、異国情緒漂う風光明媚なところであった。あちこちに温泉が湧き出していたり、自然の恵みは豊富だが、富士火山帯の通り道なので地震が少なくはない。

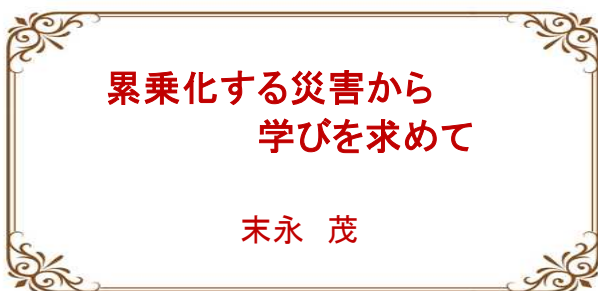
1974 年（昭和 49 年）5 月 9 日の伊豆半島沖地震では、石廊崎近くの中木の集落が山崩れで一瞬にして消えてしまった。伊豆半島を北上すると箱根の芦ノ湖というカルデラ湖がある。芦ノ湖を取り巻く外輪山の稜線を上方に伸ばしていくと、富士山よりも裾野の広い、さらに大きな山があったと容易に想像できる。Google Map で上空から確認できるが、残念ながら、この想像上の山体は大噴火でその上部が吹き飛んだか、あるいはマグマが抜けて陥没したのか？それか

ら芦ノ湖ができたのだが、この火山は現在も活動中で箱根の火山性群発地震は記憶に新しい。1983 年の三宅島の噴火、1986 年の大島の噴火、1989 年の伊東の手石島の海底噴火と続き、いよいよ富士山噴火のサインかと思ったのだが、箱根の火山性群発地震のところから先には進んでいない。近い将来必ず起きると言われている海溝性の巨大地震であるとされる東海地震は、言われ続けて 30 年以上になるがいまだに起きていない。その前に東日本大震災が起きてしまった。珍しい海底噴火のあった伊東の手石島の近く、内陸部に大室山という一目瞭然で噴火口であるとわかる高木の生えていない山がある。大室山の噴火は 1 万年ほど前の事らしい。古来より人々は災害と共生して来たのだ。

私は東日本大震災のすぐ後の 2011 年 4 月から仙台に住んでいるから、この 4 月でちょうど 10 年になる。仙台に来てすぐに津波の被災地を見て回った。気仙沼の鉄道高架橋上に根っこがむき出しの大木が乗っていて、見上げながら津波の凄まじさを実感した。すぐに下田市の友人たちに連絡し、実際に見なければわからないかと、津波の被災地を視察するように勧めたのだが、わざわざ見に来た者は一人もいなかった。浜の景観を損なう堤防は嫌いだけれど、下田港の堤防は情けないくらい低いもので、東日本大震災級の津波ではひとたまりもない。下田市街は全滅してしまうだろう。

海溝性の巨大地震は 300 年に 1 回起こるとか、東日本大震災は 1,000 年以上前の巨大地震貞観地震の再来であるとか、とにかくそのスパンは人の一生に比べてあまりに長く、子々孫々代々そこに住んでいる人が多く、私のように好きでそこに住んでいる者は少数派だろう。転勤族もいるが、代々その場所に住んで産業の発展

とともにそこに暮らしている人たちが多く。代々農業を営んできたけれど、今は子供達の代は東京に働きに行っているという人たちも多く、残された老人ばかりが目立つ。どんな天災が起ころうとも、もうここを動かないぞと覚悟している、東京直下型地震が起きて東京壊滅ということもあり得るのだ。人々は災害と共生して来たのだから、今こそ、その知恵を生かそう。そして遠く離れて暮らしている家族のことも守るのだ。



出不精の生活が性に合っているのか、これまで研究会や学会の時くらいしか遠出をしたことがない。特に学生の時旅費の工面など出来ようはずもないから、出かけるといっても図書館か神保町の古本屋あたりであった。そこで『日本災異志』という本を見つけ、定価よりも高かったので値段の交渉をしたが、プライドの塊のような古書店主は、ほとんど値引きには応じない。後日、閉店間際で他の客がいない時間を見計らって、何とか負けてもらったことがある。当時は高額な本だったため思い出深い一書である。原本は明治 27 年に出版され、その後幾つかの出版社から復刻版として発行された。この本は我が国の有史以来の災害記録を編纂したものである。『理科年表』ではこれを基に、明治以前の地震災害等を記録している。

暦年の情報に触れると、日本列島はまさに災害列島の感を否めない。しかしながら、江戸時

代の大事件は？と問われれば、「忠臣蔵」くらいなもので、ヨーロッパのような大規模な戦乱はほとんど発生していない。我が国は「平和」と言えば平和。人々が従順といえそうなんだろうが、「プガチョフの反乱」のように百姓一揆は拡大しない。それも農作物の反収が高いから、不満の程度も高が知れている。しかも、江戸時代の人口が 3,000 万人程度と一定しており、実に安定した社会を形成してきた。借金をしても除夜の鐘と共に帳消しになる社会とは、プロテスタンティズムの精神に反する、素敵な社会である。なお、単位当たりの収量はカロリーベース換算で比較して、欧米の 3 倍程度だったとの記録もある。我が国には「貧農史観」というものがあり、古代から一貫して過酷な年貢の取り立てで、農民は水呑百姓が殆どだったような印象があるが、むしろこれらは江戸末期や戦前・戦中の戦時体制、敗戦直後の経済破綻からインプリントされた、歴史限定的な貧乏物語なのではないかと推察される。

映画『七人の侍』はその観念をフィクションとして大成する役割を果たし、そしてそれ以上に郷愁さえ感じさせる。この映画はアメリカの西部劇映画に影響を与え、類似の作品が多数制作された。だが、我が国ではリメイクされた映画すらまだ制作されていない。そのため映画愛好者は当時の不鮮明な映像と音声を我慢しながら、何度も視聴しなければならない。欧米の優れた芸術家や文芸・学問が世界に冠たる存在を示しているのは、類似の作品群や高度改良を何層にもわたって形成しているからに他ならない。この点では学ぶべき教訓が大きいように思う。

(2021/02/21)

## 変わらと思ったけれど、 変わらない事

金森 明男

事実としての大震災は、2011年3月11日、14時46分に発生し、...と、科学的事実を並べれば、表現出来るのですが、ここから、二つの側面が見えます。

科学的側面－発生原因は？ 今後どうなるのか？

世の中の側面－各個人が、地震にあった時、受け止めた地震経験は、特定の時刻に起きた地震だけではなく、その後の復興に要した精神的・肉体的負担の全てになります（地震以前の状態も絡んできます）。そして、復興が完了したなどは、云えない状態では、経験した人全てに、各々の地震体験が有るのでしょうから、“東日本大震災”は、その全ての総合されたモノで、継続中の震災です。ですから、個人の経験の数だけの側面があります。その条件は、何が関心事であるかに関わると云うより、関心事で決定されます。各個人にとって、真実として実感されるのは、各個人が経験した事実だけです。だから、総体としてあるはずの事柄とズレが生じてしまうのでしょう。

これは、原発事故でも同様です。

そして、現代での出来事の多くは、主体自体が他からは見えにくくなっています。より正確には、主体は、はっきりしているはずなのですが、誰も責任を取らない事で主体を隠してしまいます。一方の当事者・被害者にとっては、何処にも曖昧な点など無いのですが、責任を取らない事により実現させます。

考え方が違う世界もある様です。

『新書アフリカ史 改定新版』（宮本正興・松田素二編、講談社現代新書、2018年11月20日）

さまざまな紛争を解決する現場において、アフリカ社会は二つの原則にしたがって多種多様な方策を創造してきた。

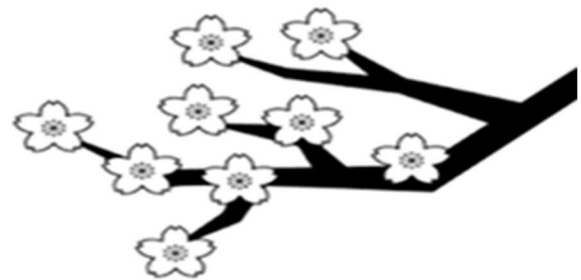
二つの原則とは、一つは「癒しと共生」の原則であり、処罰ではなく加害者受容を優先する。それは犯罪者、加害者個人に罪を負わせるのではなく、加害者を再び共同体に受容するための社会的手続きに創意工夫を凝らす。

もう一つは「真実の複数性」の原則であり、近代の法と法廷が採用してきた物証に支えられた唯一の真実よりも和解の追求を優先する。物的証拠に裏付けられた唯一絶対の真実とはまったく別種の、交渉・折衝によって変異する真実に基づく集合的判定を重視するのである。

（682頁）

原発事故に適用出来るか疑問なのですが、と云うより、他の要素が多すぎる（最終的には軍事的要素が残り、突破は可能か）のかもしれませんが、違う考え方も有ると知る事は、変わらないと思う事柄に、別の角度から光を当ててくれます。

何よりも、変わらない・変わらない思いを抱いているのは、私自身です。







## 「3.11」から 10 年

芳川 良一



早いものでもう 10 年ですね。わたくしは 2010 年 3 月に停年退職をして、生まれ故郷の大崎市三本木に戻ってきました。戻って一年も経たないうちに東日本大震災の洗礼を受けたわけです。退職後の田舎生活と震災からの時間経過がほぼ重なるのです。

どんな 10 年だったか?福島第一原発事故を契機に、長年心の奥に仕舞いこんでいた原発の意識が顕在化してきました。そして、事故でばら撒かれた放射能拡散を目の当たりにし、放射性汚染廃棄物問題にも関わるようになりました。この 10 年は、女川原発再稼働反対と放射性汚染廃棄物焼却反対を軸に動き回った、と言ってもいいように思います。勿論、原発や放射能に関する特別な知見があるわけでもなく、地域での特別な力があるわけでもありませんので、関わったと言っても「素人の頑張り」で、たかが知れています。微力で、地味で、ささやかな関わりです。「『3.11』から 10 年」のテーマで書き始めたら、この 10 年はそのような括りになりそうです。

女川原発再稼働については TV や新聞などで頻繁に報じられているので、あえて言及しませんが、原発事故の教訓を生かしきれない、アナクロニズムで、原発温存のエネルギー政策にしがみついた愚策としかいいようがありません。

今回は事故で拡散された放射能について、国はいかに間違った方向で処理しようとしているかについて、すこし触れてみたいと思います。

昨年の秋に土壌の放射能汚染について講演をしていただいた講師(市民科学者)を案内し鬼首の禿(かむろ)岳に登り、麓にある古川高校の山小屋で慰労しました。そのとき採取したキノコから 1,990Bq/kg のセシウムが検出されたのです。前後して気仙沼の野生キノコから 980Bq/kg 検出されたと報じられました。ついこのあいだは福島沖で獲れたクロソイから 500Bq/kg のセシウムが検出されたそうです。放射能は 10 年ぐらいでは消えてくれないのです。100 年、200 年の単位で見ないといけません。人に害を及ぼす放射能で典型的なのがセシウム 137 です。そのセシウム 137 の半減期は 30 年です。30 年経って初めて半分に、60 年で 4 分の 1、90 年でまだ 8 分の 1 なのです。われわれはこれから先長い間、内部被ばくの危険とともに生きないといけないのです。しかし、国は恐ろしいことを企てています。そうした危険な状況にあるなか、1 億 2 千万の国民を総被曝させ、日本列島全土に放射能を拡散させようとしているのです。福島第一原発で発生した汚染水を海洋投棄しようとしています。環境省は県内丸森町で除染土の再生利用の実証実験を 3 月から実施すると発表しました。国は実証実験で安全が確認できたとして、全国の公共事業(道路など)に除染土を利用しようとするでしょう。大崎地域では放射能で汚染された農林系の廃棄物を一般ごみといっしょに燃やしています。これから 7 年間にわたって燃やし続けるのだそうです。

こうしたことが続けられるようでは、わたくしの原発・放射能との関わりあいも 10 年で括ってしまうわけにいかなさそうです。原発・放射能との関わりの中かで人生の終点を迎えそうで、書いているうちにだんだん憂鬱になってきました。

## 原子力マフィアの“呪力”

半田 正樹

7.1万人。これは、そのほとんどが「3.11」の福島第一原発災害により、居宅（ホーム）にとどまることが叶わなくなり、いまなお県内外に避難している福島県民の数である（2021年1月末現在－福島県内市町村発表の合計値。ちなみに福島県発表の概数は約3.6万人\*）。むろん、この数字の何倍かの福島県民が、「3.11」までとはまったく違った生活日常を余儀なくされてきた状況は、さまざまな角度から取り上げられてきた。

しかるに、原子炉崩壊がもたらした厄災は、福島県民を含む“ほぼすべて”の人々の原発に対する認識を変え、「エネルギー」に対する考えの変更を促し、生活のありようの省察を迫った。多くの人々は、節電の意識を身につけた。客観的には、2012年5月5日から2015年8月14日までの3年3ヶ月の間、日本の原発は“すべて”停止したものの、電力の供給に支障を来すことはいささかもなかった。原発についての「絶対安全」の観念が崩れ、さらに「経済効果」、「クリーン」などの言説もまったくの「神話」に過ぎなかったことが次々と白日の下にさらされたのであった。

しかし、わたしたちは、わずか3年余で原発をめぐる「神話」が復活し、それが徐々に強固な輪郭を持ち始めた現実を突きつけられつつ、現在を迎えている。「神話」復活を仕掛けてきたのは、いわゆる「原子力マフィア」（小出裕章氏による造語で、電力会社・原発メーカー・ゼネ

コン・政治家・財界・官界・司法・学者・マスコミ・広告会社・労働界等から構成される）である。

「3.11」から10年。わたしにとって強く印象に残った事象の1つが、この原発をめぐる「原子力マフィア」の“開き直り”と、それがもつ“呪力”であった。その“呪力”は、社会の仕組みの支柱となる規範・ルールをも侵襲している。

例えば、「民主主義」を支える討論・対話。女川原発再稼働に関しては、県民が再稼働の是非を問うため、県民投票条例を求めて署名活動を展開し、法定有効数を大きく上回る署名を得て条例案を提出したものの、実質的な論議がないままあっさりと否決された。これをふまえて宮城県議会の野党会派の議員が提出した県民投票条例案も、討論が一切省かれる形で即日採決され、賛成少数で否決されてしまった。

また、再稼働についての「地元同意」の「地元」が、住民ではなく、議会であり、なによりも首長そのものと同義であり、しかも、首長（県知事と立地自治体の町長・市長）が住民と幅広くかつ徹底的に対話し、民意を把握した上で「地元同意」の結論にいたるといようなプロセスは微塵もなかった。

なぜ、「原子力マフィア」は、このような一義もなく、問答無用の「やり口」をとるのだろうか？

わたしはいま、近くの山道を散歩し、春を告げる野草・草木の芽吹きにじっくり目を凝らしながら、福島の帰還困難区域でも同じように野草・草木が春到来をささやいているだろうに、それに一瞥を投げる人すら一人もいないことの意味をかみしめている。

\*「河北新報」(2021/01/31) <https://kahoku.news/articles/20210131khn000005.html>

## コロナに打ち勝って オリンピック祭典

千田 嘉三

人新世の始まりともてはやされております今日、魁（さきがけ）の難題はコロナ感染症が世界中に広まって、収まる気配がないということです。オリンピック祭典も危ぶまれております。

「コロナが世界を変える」、勢いですね。いや「コロナが世界を変える」チャンスにしたいですね！毎日、新聞やテレビでコロナの感染症情報が報じられております。東京都の感染者数が夕方報じられ、数値が前日より多い時はため息をつき、少ない時は安心するという生活です。はやくて終わって欲しいですね。主なる国の感染者数と主なる指標をあげました。

	感染者数 (人)	死者 (人)	総人口(人)	国内総生産 (百万ドル)
世界	1億1380万	253万	77億13百万	87,552,440
アメリカ	2855万	51万	3億29百万	21,433,225
インド	1109万	15万	13億66百万	2,868,930
ブラジル	1052万	25万	2億21百万	1,839,077
中国	10万	4834	14億34百万	14,731,806
ロシア	418万	8万	1億46百万	1,702,496
日本	43万	7859	1億27百万	5,079,916
南アフリカ	151万	5万	59百万	351,354

表はコロナが世界で数値からどうなっているかを概観したものです。感染者数・死者（「毎日新聞」3月1日。元出典は米国ジョンスホプキンズ大）。他は最近のスマホに公表されたデータです。今年予定されております国際オリ・パラオリンピックすなわち五輪の1輪の南アフリカのデータをとりました。コロナが世界をおおって

おりますが是非とも実現しましょう。

「過去の戦災・災害はどうだったでしょうか」第二次世界大戦:被害者8,500万人(飢餓含む、当時の人口の2.5%)であり、今回のコロナ感染者は1.5%になります。今後の感染拡大予想は如何によって東京開催はあるのか、瀬戸際です。

前回のソウルオリンピックは朝鮮半島の統一と友和がテーマだったとおもいます、ソウルオリンピックは大成功でした、かつ仙台出身の羽生結弦選手の大健闘活躍があり、そして今回は日本が主催地です。次は中国(冬季オリンピック)と東アジアの3か国立て続けの開催です。コロナが世界的に蔓延する中の大事な「平和の祭典」です。国際情勢上の留意すべき懸念は尖閣諸島・竹島の帰属に絡んだ領土問題が平和的に解決合意出来るかの課題が目前に提起されているという事ではないでしょうか。

コロナの世界的感染症の広がり日本を舞台とするオリンピック祭典との重なった事は単なる偶然はないでしょう。

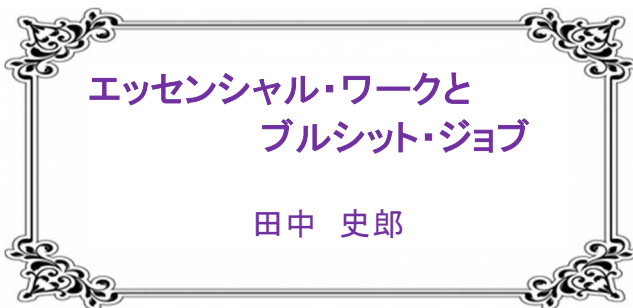
仙台・羅須地人協会のことに触れてみます。東北大学名誉教授大内先生の元で「資本論を学ぶ」という事で月2回市内「シニアネット」の教室を借りて時局の話題にも触れてそして今日的手法のテレワークをも採用しております。年齢が高いのが特徴的ですが、若い方をおまわししております。

リーダーの大内先生は日本のマルクス経済学、今や重鎮です。宇野弘蔵氏のもとで「資本論」を広範囲に理論上の拡大と発展に未だに昼夜をとはないで、老いをわすれた毎日を過ごされております。「資本論」に関してはフランス構造主義の巨匠と目されるルイ・アルチュセールが「資本論」はあらゆる分野で読まれるべきと喝破し

ております。刺激的です。

大内先生・宮沢賢治の「コモン」が創り出す平和な世界をどう構築するかと壮大な夢を共にいたしましょう。「仙台・羅須地人協会」が平和なアジアの一粒の一石になりたいものだと念じて！

賢治が大切な局面に立った時の究極の作法に彼が信奉者釈迦と同一者たる日蓮大聖人の業たる「南無妙法蓮華経」の唱題と天空に響く「うちわ太鼓」を打って町中をご修行したとのことです。



あれから 10 年が経つが、先日（2 月 13 日）の大きな揺れが「3.11」の余震だということを聞かされ、大震災が終わっていないことを思い知らされた。また、昨年から続く「コロナ」収束の兆しも見えない。この間を通じて、われわれの日常生活や大きくいえば資本主義というのが問い直されてきたことは周知のことであろう。そうした中であって、あらゆる社会の基盤となる労働にかんしても同様であろう。エッセンシャル・ワークとブルシット・ジョブをキーワードとして考えてみたい。

災害や感染症の蔓延など、困難な状況のときに指摘されるのが、エッセンシャル・ワークの重要性である。エッセンシャル・ワークとは、医療や介護はもとより、生活インフラ、交通・通信、生活必需品の販売、そしてゴミの収集な

ど、日常生活を送るために欠かせない仕事をさす。そしてこれらの仕事は、対面や現業が多い。デジタル化が進み、効率化が求められても、それには乗りにくい業種や職種であるとともに、一部を除いて、低賃金であることがしばしば指摘されている。

こうした労働の対極に、ブルシット・ジョブがある。それは、D.グレーバー（酒井隆史・芳賀達彦・森田和樹、訳）『ブルシット・ジョブ』（岩波書店、2020 年）によって命名されたものだ。bullshit とは、「戯言」や「デタラメ」などの意味をもつが、訳者はこれに、「クソどうでもいい」という日本語を与えている。著者はそれを「取り巻き、脅し屋、尻ぬぐい、書類穴埋め人、タスクマスター」などとやや抽象的に定義しているが、日本に例を求めれば、企業顧問弁護士、金融や不動産のコンサルタント、一部の議員や公務員、お飾りの受付係、広告作成者、高級マンションの門番などが思い当たる。あるいは、官僚の天下りなどは、それがブルシット・ジョブであるがゆえに可能なのである。そして、これらの職は、場合によっては高給であるものの、実のところ、本人でさえ無意味で不必要だと思っているとのこと。

一方で多くのエッセンシャル・ワークの低賃金と、他方である種のブルシット・ジョブの高給は、いずれも資本主義のメカニズムから生じたものである。資本主義や市場経済は、自由な契約を通じて効用が価格に反映される筈であるとされているが、それは単なる建前であって、実態はかけ離れている。エッセンシャル・ワークとブルシット・ジョブとの対比はそれを炙り出す。この 10 年を通じて、労働の意味や意義を考えた人は多いのではないか。

